

## 県南の動きと

### 佐伯史談会の活動

真 柴 茂 彦

(会員 佐伯市中の島三丁目)

平成十七年は佐伯市と南海部郡八カ町村が大同合併の年である。地理的には岡藩であった宇目町を取り込んでの旧毛利藩が復活したようなものである。政経的な方向は次第に形が見えてきているが、文化面ではこれからである。

佐伯市の有志で結成され、次第に南海部郡に広がり、さらに県内外の会員も参加し拡大してきた史談会、現会員三二四名、新しい佐伯市になることにより名実共に会の活動範囲を示すことになる。

昨年の史談会県外研修の帰りに寄った宇佐風土記の丘の県立歴史博物館で特別展「南無阿弥陀仏―浄土への道」を見たが、善教寺・潮谷寺の阿弥陀如来像があり、この説明の中で、県南は鎌倉中・後期のすばらしい仏像が多

いという話があった。

県段階でもまだまだ開拓の余地のある新佐伯市に目が向いてきている。ここ数年の県南に関わりのある動きを見てみると平成十年、国の補助を受け、鶴見町、蒲江町を中心にした猪垣の調査が平成十三年より二年間行われ、米水津、弥生、佐伯など広く県南の歴史的な所産としての農民生活の一端に調査のメスが入れられた。猪垣は県内では国東半島と県南に分布している。県南の方が規模も大きく範囲も広い。この調査の成果は平成十三年に「大分のシシ垣」としてまとめられ、今後、国の民俗文化財としての指定の方向が検討されている。

また、すでに歴史の範疇に入った西南戦争の戦跡調査が平成十四年より「西南戦争を記録する会」により進められ、「西南戦争之記録一・二」と、すでに二冊の報告書として完成している。一には県南の直川と宇目の古戦場や文書、銃について記載されている。二には該当がない。

また、文化庁の九州山地のカモシカ調査が平成十四・十五年度に行われた。国天然記念物としてのカモシカの生息地と個体数の変動を五年置きに調べているもので今回が三回目である。県南では傾山系が調査対象地点に含まれ、藤河内、杉方越、鷹鳥屋山などが調査対象地と

なっている。調査ではカモシカの生息予想数は前回より少ない。

また、平成七年に始まった中世の城館跡の調査では四部の報告書がまとまり、第三集に（佐伯）木戸城、曳地館、河内城、河波ヶ城、中山砦、高城、八幡山城、上の台館、宇山城、梅牟礼城、（弥生）竹田城、平城、小田山城、小田山館、大友山砦、彦岳城、（本匠）困ヶ岳砦、柳井館、空の塔砦、（宇目）朝日嶽城、市園砦、城の腰城、蔵小野砦、荒内砦、飛山城、駒鳴砦、皿内砦、悪所内砦、（直川）用來城、赤木城、（鶴見町）宇土山城、（米水津）浦城など多くの城や館、砦があがっている。この中で梅牟礼城は弥生に、彦岳は佐伯、上浦にまたがっている。

県南の九州自動車道が佐伯を経て北川町まで進むようにしている。梅牟礼地区のように時として史跡のある場所に行き当たることも考えられる。関連の調査では、門前地区で発掘調査が行われ、「梅牟礼城跡―角木中世集落跡」として県の報告書にまとめられている。

また市町村のまとめ段階の報告書も出ている。佐伯の教育委員会でも「温故知新」の五巻、「毛利家資料調査報告書」などが完成している。本匠村では「本匠の古文書上・下」が米水津村では「村の古文書四・五合冊」と

「宝永四・安政元年村の大地震・大津波」が完成している。蒲江町では「蒲江町の神楽」「蒲江町盆踊り説集」「蒲江町植物図鑑」が完成、三月には新版の「蒲江町誌」がでる。鶴見町では「鶴見の文化財」の新版が、宇目町では「うめまちの先覚者」などがある。

佐伯史談会の新しく始まった「ふるさと探訪」では合併に伴い、各市町村にはこれまでに指定された文化財について知りたいという希望があり、各市町村で独自に決定してきた物件、指定の基準など勉強することにした。

会員の目で確かめ、文化財愛護と今後の展望を共に考えていこうと云うことになり、佐伯を皮切りにすでに十六年十一月、八幡、十三重塔、毛利藩墓地、掩体壕などを巡回した。

また今年十一月の「佐伯史談」で二百号になる。先人たちの歩みの継承者として私たちの研鑽もこれからである。節目である二百号の内容について、皆さんの協力のもと、佐藤編集長と共に記念号に、ふさわしいものにしていきたいという方向が拡大常任委員会で承認された。

新しい佐伯市にふさわしい充実した活動になるよう皆さんと共に頑張りたい。